

箕輪城(国の史跡, 百名城) (高崎市箕郷町西明屋字城山)

箕輪城(みのわじょう)は、群馬県高崎市箕郷町にあった日本の城(平山城跡)で、国の史跡に指定されている。日本100名城の一つ。

概要

箕輪城は、榛名白川によって削られた河岸段丘に梯郭式に曲輪が配された平山城である。城の西には榛名白川、南には榛名沼があり、両者が天然の堀を形成していた。城地は東西約500メートル、南北約1,100メートル、面積約47ヘクタールにおよぶ広大なものであった。現在にのこる遺構として、石垣・土塁・空堀の跡が認められる。

歴史・沿革

戦国時代・安土桃山時代

- 1512年(永正9年) 戦国時代中期、当地を支配する長野業尚によって築かれた。
- 1526年(大永6年) 業尚の子の信業によって築かれたという説もある。

ただし、当時の長野氏の系譜および人物については諸説あり、確実な事実については不詳である。なお、長野氏は在原業平の子孫とされている。

戦国時代の上野には関東管領山内上杉家が存在したが、上杉憲政が越後へ亡命した後はその重臣長野氏が残り、相模を本拠とする北条氏、甲斐の武田氏、越後の上杉氏(上杉憲政の名跡を継いだ)が侵攻を繰り返す場であった。このようななかで長野氏は、上杉氏の後ろ盾を得ていた。信業の子長野業正は箕輪衆と呼ばれる在郷武士団をよく束ね、「名君」と謳われて長野氏全盛時代を築き、最大の版図を有するに至った。業正の代にはまた、武田信玄の侵略がたびたび繰り返されたが、これをよく退け安定した地位を保った。

- 1561年(永禄4年) 業正が没すると(前年に没した説もあり)14歳(17歳とも)で子の業盛が家督を継いだ。業正は臨終に際し「我が葬儀は不要である。菩提寺の長年寺に埋め捨てよ。弔いには墓前に敵兵の首をひとつでも多く並べよ。決して降伏するべからず。力尽きなば、城を枕に討ち死にせよ。これこそ孝徳と心得るべし」と伝え、その死は永らく秘匿された。しかし、業正の死を知るや信玄は再び西上野への侵攻を開始した。近隣の城を落とし、また調略を仕掛け寝返らせていった。
- 1565年(永禄8年) 頃には箕輪城は孤立していき、翌1566年(永禄9年) 武田軍は箕輪城への総攻撃を仕掛け、頼みの上杉謙信の援軍を待たずして9月下旬には遂に落城し業盛は自刃して果てた。こののち箕輪城は武田氏の上野経営の拠点と位置づけられ、有力家臣である甘利昌忠、真田幸隆(幸綱)、浅利信種が城代に任じられる。
- 1570年(元亀元年) 頃には内藤昌豊(昌秀)が城代となる。
- 1575年(天正3年) 長篠の戦いで内藤昌豊が討ち死にすると、その子内藤昌月が城代に任じられている。
- 1582年(天正10年) 2月、天目山の戦いで武田氏は滅亡したが、この機に乗じ北条氏政の弟・氏邦が侵攻した。しかし、同年、氏邦は織田信長の家臣・滝川一益により追われ、さらに、この年の6月、信長が本能寺の変で倒れると、北条氏直・氏邦の大軍が上野国に侵攻、神流川の戦いで一益を破り、氏邦が再度箕輪城に入城、内藤昌月もこれに従った。
- 1590年(天正18年) 豊臣秀吉の小田原征伐の際に箕輪城は前田利家・上杉景勝連合軍の攻撃により開城した。この年、徳川家康が関東に入封し、箕輪城は12万石をもって井伊直政に与えられた。直政は箕輪城を近代城郭に改造したが、1598年(慶長3年) 高崎城に移封され、それに伴って箕輪城は廃城となり、80余年の歴史に終止符を打った。

現代

- 1987年（昭和62年）12月17日、国の史跡に指定された。
- 2006年（平成18年）4月6日、日本100名城（16番）に選定された。
- 城門や土塁などを復元する計画がある。

Wikipediaによる



箕輪城跡 案内図



■ 土垣
■ 堀跡
■ 水堀
■ 水堀

東明彦

今
平

昭和57年3月

